

1975.8.28 朝日夕刊

ハブウホウニ 京都シンポジウムに寄せて

>>下 朝永 振一郎

吹き飛んだ核戦の空気を
一九六〇年代の後半になって、
現実の国際情勢がわがや、パナ
マ運河、金剛山の建設の空気を
かき飛ばすという問題があら
われはじめた。それは国際世論の
圧倒的な要求である全面完全軍縮
がその後一向に進まないうちであ
り、またすでに第一回会議の声明
の未償で非武装化された米ソ核競争の
激化は一向整理しないうちで核
争はますます激化して来たことだ
である。またこのUJIA無関係は
ないが、核競争を激化する国の増加
のきびが無意味に顕在化してき
たことである。言い換えても、ハ
ブウホウ戦争も核戦の空気に響
鐘であった。

悪循環を生み出す抑止体制 いまこそ「宣言」に戻るとき

核戦の空気の塵物の一つに核抑
止論があったことは前に述べた。
でも核によつて戦争を抑止す
るという考えはすでに第三回会議
に出されてる。この考えをまっ
た議論はたゞしは言つた次の
ようになる。米ソ両陣營が相
互に均衡した核戦力をこれだけ保
持して置く。そのときその戦力
は、たとえそれが一挙に相手の戦力
全部を破壊するには十分なよう
なものである。

一九六〇年代前半まで、このよ
うな自己抑止は目に見えるほど顯
著でなかった。しかし後半になっ
てそれが今までのなくはつきりこ
た形であつて来た。
それは米ソ両陣營において宇宙開
発技術や、ロケット技術の
急激な進展と、核兵器開発とが結
びついて、以前には技術的に不可
能と思われた性能の新核兵器体系
があらわれたことである。この
諸問題にそれぞれ新兵器の名称だ
けをのべるが、一九六七年にソ連
は、米の核戦力に対する「報復」
からA B Mを開発してその配備を結
わった。これを知った米は自己の
戦力の相対的弱体化の「警告」から
直ちにM I R Vを開発し、その上
さらにM A R Vの開発をはじめよ
うとしてくる。そしてソ連もM I
R Vの開発をやり出した……、わ
れわれは目の前に抑止体制の自己
運動を見せつけられるのである。
米ソ両陣營の間には、またい
言われる緊張緩和の傾向が見られ
しうものは歓迎すべきことだが、
それがなかなかわがやと両陣營は現
在の自己運動を止めてこたに成
功してない。

深刻な核拡散の顕在化
これは核戦の空気を打ちこわし
たのは核拡散の顕在化である。
この原因は原子力発電の増大にと
もなフルトニウムの増加から、
このままでは何年か後に手にたえ
ない問題になると考えられてい
る。その上、現在世界には中東紛
争をはじめ、このあつた紛争が
存在し、あるいは紛争の種が潜在
している。

このあつた抑止論がしては
は核戦の空気を打ちこわすとい
は、素直に両陣營の行動を支配
するものは、それぞれの核戦力の
大小であるよりも、むしろ報復さ
れる戦力とどう主観的のものの大
小である。従つてこの抑止体制は
決して安定なななうた。なほ
な一方の戦力が大きくなると、そ
の側は自分の戦力を増強したくな
るだろう。そしてまたわがや、
それは他の側の戦力を増強した。従
つてその側は自分の戦力を増強し
たくなるといふ。そのあつた
戦力増強の悪循環はかきこむ。こ
ういふように、抑止体制は終
局的に巨大化に向かつて自己運動
的である。

(東京教育大学名誉教授)

C092-17-031